

○ 本校の概要

- ・児童数:403、学級数:12、教員数:18
- ・平成23年度より「おおたサイエンススクール」指定校(おおた教育振興プラン 大田区教育委員会 理科教育研究推進校)
- ・平成25年度より 文部科学省教育課程特例校 サイエンス・コミュニケーション科新設

○ 自己評価及び学校関係者評価の結果の概要と改善策

大項目	目標	取組内容	取組指標	取組評価	目標に対する成果指標	成果評価	これまでの取組 今後の改善策	学校関係者記入欄 評価 人数 コメント
プラン1 未来社会を創造的に生きる子供の育成	コミュニケーション能力、情報活用能力、ともに生きる力等、これからの社会の変化に合わせた対応する子どもの力と自信を身に付けます。	外国語教育指導員を効果的に活用し、外国の方々とコミュニケーション能力の育成を図っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上が回答した。 2:60%以上が回答した。 1:60%未満であった。	4	4:90%以上	4	「学校での学習を通して、自分の力が上がり、成長した」と、回答した児童は、93%である。児童は、様々な教科の学習を通して、自分の学力の伸びを実感していると言える。自由記述からは、特に高学年では、自分の考えを書きまわしたり発言したりすること、考えを友達と伝え合うことなどといった活動で自分の力が高まった。成長したと感じていると答える。一方、高まりを感じられていない児童は、7%弱である。特に4年生以上の高学年に上がるにつれて増える傾向にある。背景には、学習内容が高度になることや、塾等の学校以外の学習の場が広がることも考えられる。学校として、どの児童にも、達成感を得られるように授業を工夫したり改善したりする必要がある。	A 7 B 0 C 0 D 0
		論理的、科学的な思考力の育成を目指し、「おおたのものづくり」を生かした体験活動や理数授業等を実施する。	4:全教員が行った。 3:80%以上の教員が行った。 2:60%以上の教員が行った。 1:60%未満であった。	4	3:85%以上	4		
		学力の定着と学ぶ意欲の伸長を目指し、ICT機器を活用した授業を実施する。	4:設置教室を使用する全正規教員が週1回以上活用した。 3:80%以上の正規教員が週1回以上活用した。 2:60%以上の正規教員が週1回以上活用した。 1:60%未満であった。	4	2:80%以上	4	児童アンケートで「学校での学習を通して、自分の力が上がり成長した。」の肯定的な回答の割合(4段階上位2位までの割合) 371人回答/398人中 肯定的回答(93.2%) (アンケート回答率 98%)	
		他者の人権を尊重する人権教育の推進を目指し、人権教育資料等を活用した授業を実施する。	4:対象となる全学級(全教員)で行った。 3:80%以上で行った。 2:60%以上で行った。 1:60%未満であった。	4	2:80%以上	4		
		体力テストの結果を踏まえ体力向上全体計画を作成し、計画に基づいた体育指導や「一校一取組」運動や「一学級一実践」運動を実施する。	4:全教員で行った。 3:80%以上の教員で行った。 2:60%以上の教員で行った。 1:60%未満であった。	4	1:80%未満	4		
		理科・サイエンスコミュニケーション科を重点として、対話を通して、主体的に問題解決する力を育む授業を行い、科学教育を推進する。	4:90%以上が肯定的な回答をした。 3:80%以上が肯定的な回答をした。 2:70%以上が肯定的な回答をした。 1:肯定的な回答が70%未満であった。	4	1:80%未満	4		
プラン2 児童・生徒一人ひとりの学び意欲を高め、確かな学力を定着させます。	児童・生徒一人ひとりの学び意欲を高め、確かな学力を定着させます。	学習カルテを基に児童・生徒と面談し、一人ひとりの学習のつまずきや学習方法について、指導する。	4:対象となる全学級(全教員)で行った。 3:80%以上で行った。 2:60%以上で行った。 1:60%未満であった。	面談未実施	4:95%以上	4	「学習が楽しい」と、回答した児童は、95%であり、昨年度より2%増加した。コロナ禍ではあるが、臨時休業明けから多くの児童が、学校に通いながら、前向きに楽しんで学習に取り組んでいることが伺える。一方、5%の児童は、肯定的に捉えられていない。全ての児童が、「分かった。」「できた。」「という学びの楽しさを味わえるように、どの教科においても、授業の改善に取り組む必要がある。	A 6 B 1 C 0 D 0
		算数・数学到達度をステップ学習チェックシートで児童・生徒、保護者に知らせる。	4:学期に2~3回知らせた。 3:学期毎に知らせた。 2:年度間に1回は知らせた。 1:お知らせできなかった。	2	3:80%以上	4		
		学習指導講師等による算数・数学・英語の補習を実施する。	4:対象児童・生徒への出席を全教員が働きかけた。 3:80%以上の教員が働きかけた。 2:60%以上の教員が働きかけた。 1:60%以下の教員が働きかけた。	4	2:70%以上	4	児童アンケートで「学習が楽しい」の肯定的な回答の割合(4段階上位2位までの割合) 379人回答/398人中 肯定的回答(95.2%) (アンケート回答率 98%)	
		授業改善推進プランを、授業に生かす。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上が回答した。 2:60%以上が回答した。 1:60%未満であった。	3	1:70%以下	4		
		学習のつまずきを把握し、繰り返しの学習を通して、基礎学力の定着を図るため、東京ベネッセドリル診断シート(A、B、C)を、毎学期実施する。	4:毎学期実施した。 3:2学期分実施した。 2:1学期分実施した。 1:実施しなかった。	4	1:70%以下	4		
		小中一貫による教育の視点に立った生活指導の充実により、社会のルールや学校のきまりなどを守ろうとする意識を高める。	4:全教員が行った。 3:80%以上の教員が行った。 2:60%以上の教員が行った。 1:60%未満であった。	4	3:80%以上	4	「友達と遊んだり、勉強したりするのが楽しい」と、回答した児童は、97%であり、昨年度より2%増加した。児童は、友達との関わりの中で、学校生活を肯定的に捉え、社会性や相手を手を思いやる態度を学び、成長している。特に今年度は、臨時休業に伴い、長きにわたって友達と関わる機会がなかったことも、改めて友達と関わる楽しさを実感することにつながっているようだ。しかし、日々の生活において、友達関係のトラブルは避けられない。些細なことも見逃さず、早期対応を心掛けていく必要がある。引き続き、学校全体として児童の様子を把握する時間を設定し、生活指導委員会等で教員間の共通理解を図っていく。また、課題については、解決に向けて、いじめ対策委員会や問題行動対策委員会等を通して組織的に対応し、児童や保護者の立場に寄り添いながら解決していく。	A 6 B 1 C 0 D 0
プラン3 子ども一人ひとりの正義感や自己肯定感、自己有用感などを高めるとともに、自他の生命を尊重する心を育成するなど、豊かな心を育む。	子ども一人ひとりの正義感や自己肯定感、自己有用感などを高めるとともに、自他の生命を尊重する心を育成するなど、豊かな心を育む。	道徳教育推進教師を講師とした研修や、国、都及び区の資料を活用した授業等を行う等道徳指導充実のための取組を行う。	4:学期に2~3回(年間6回)以上行った。 3:学期に1回(年間3回)以上行った。 2:年度間に1回以上行った。 1:実施しなかった。	3	3:80%以上	4		
		学校生活調査(メンタルヘルスチェック)の結果よりストレス症状のみられる児童・生徒に対して組織的に対応する。	4:「組織的に対応できた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	4	2:70%以上	4	児童アンケートで「友達と遊んだり、勉強したりするのが楽しい」の肯定的な回答の割合(4段階上位2位までの割合) 385人回答/398人中 肯定的回答(96.7%) (アンケート回答率 98%)	
		学校いじめ防止基本方針に沿って、いじめの未然防止、早期発見等のための取組を実施する。	4:「組織的に対応できた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	4	1:70%以下	4		
		問題行動・不登校問題等にかかわる児童・生徒に関するケース会議等を実施する。	3:必要な事案に対しておこなった会議を実施した。 2:必要な事案に対しておこなった会議を実施しなかった。 1:必要な事案に対してほとんど会議を実施せず、組織的な対応をできなかった。	4	1:70%以下	4		
		「たてわり班」活動を活用した取り組みを計画的に行い、異学年交流の充実を図る。	4:前年度以上に実施した。 3:前年度並みに実施した。 2:前年度より縮小した。 1:継続できないものがあった。	2	1:70%以下	4		
		「早寝・早起き・朝ごはん」月間の取組等を通して、児童・生徒や保護者に対し、望ましい生活習慣についての意識啓発を行う。	4:全教員で行った。 3:80%以上の教員で行った。 2:60%以上の教員で行った。 1:60%未満であった。	4	4:95%以上	4	2学期に取り組んだ、体育の「持久走」において、初期の記録と、学習後の記録とを比較し、記録が向上した児童の割合とした。体育科の学習では、全学級で、授業はじめに5分間持久走を行い、計画的に体力向上を図った。また、12月には、「持久走大会」を開催し、児童の意欲を高めた。記録が向上した児童の割合が70%であった。30%の児童においては、例年行っていた、休み時間の持久走練習(全学年)や早朝持久走練習(5・6年生のみ)がコロナ対応で、行えなかったため、このことが影響していると考えられる。また、休み時間の校庭遊びでも、毎日全学年が遊べるのではなく、曜日を決めて、遊べる日を限定したことも影響していると考えている。	A 7 B 0 C 0 D 0
プラン4 体力増進の向上と健康の	スポーツに親しむ心や、運動習慣の定着による体力の向上など、生涯にわたって健康増進を図る意識の向上をめざします。	給食指導及び教科等における指導を通して、食生活の充実・改善をねらった「食育」を推進する。	4:全教員で行った。 3:80%以上の教員で行った。 2:60%以上の教員で行った。 1:60%未満であった。	4	3:80%以上	2		
		体育的行事、部活動、休み時間など様々な機会を通して運動習慣の確立を推進する。	4:全教員で行った。 3:80%以上の教員で行った。 2:60%以上の教員で行った。 1:60%未満であった。	4	2:70%以上	4		
		健康で活力ある生活を創り出す力を育てるため、「元気いっぱい〇年生」の取り組みを毎学期実施する。	4:全教員(全学級)で行った。 3:80%以上で行った。 2:60%以上で行った。 1:60%未満であった。	4	1:70%以下	4		
		授業公開日の授業評価を、その後の授業改善に生かす。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	学校公開未実施	4:85%以上	4	学校公開を実施していないため、アンケート未実施。	
		授業改善セミナー等の研修成果を生かし、主任教諭が助言・支援を行う校内研修等を実施しOJTを充実させる。	4:学期に2~3回(年間6回)以上行った。 3:学期に1回(年間3回)以上行った。 2:年度間に1回以上行った。 1:実施しなかった。	4	3:70%以上	4		
		各種研究発表会等の研究・研修の成果を、自身の授業改善に生かす。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	4	2:60%以上	4	保護者による公開授業アンケートにおいて肯定的な評価の割合(4段階上位2位までの割合)	
プラン5 魅力ある教育環境づくり	児童・生徒が安全・安心に学校生活を送るために、教員の指導力向上と良質な教育環境をつくり出す。	校内委員会等を確実に実施し、学校における特別支援教育を推進する。	4:月1回以上行った。 3:学期に2~3回行った。 2:学期1回以上行った。 1:実施しなかった。	4	1:60%以下	4		
		サイエンススクールとして、の環境整備を行うとともに、理科・サイエンスコミュニケーション科の授業力向上を図るための研究授業を行う。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上が回答した。 2:60%以上が回答した。 1:60%未満であった。	4	1:60%以下	4		
		教育目標・学校経営方針・学校評価等の基本情報、児童・生徒の活動情報等をホームページ等で公開及び更新することにより、積極的に情報を発信する。	4:月1回以上更新した。 3:学期に2~3回更新した。 2:学期1回以上更新した。 1:更新しなかった。	4	4:85%以上	4		
		地域教育連絡協議会において、児童・生徒の姿容等の具体的な資料を作成して、評価に必要な学校の情報を適切に提供し、適正な評価を受けるよう努める。	4:毎回情報を提供した。 3:おおむね情報を提供した。 2:あまり情報を提供しなかった。 1:情報を提供しなかった。	4	3:70%以上	4	保護者アンケートで「学校は、地域、外部の力(学習の専門家)を子供たちの教育活動に活かしている。」を指標とした。 肯定的な回答(4段階中上位2位までの割合)は、94.1%であった。 昨年度と指標項目を変更したため、昨年度の指標項目は、「子供たち一人一人の活動が充実している。」で、昨年度は95%であった。前年度比較はできないが、9割以上の保護者に、専門や地域の力に期待している。また、教育活動を進めていることを御褒めいただき、本校の教育活動への期待が大きいと捉えている。	
		学校支援地域本部と連携するなどして、地域力を生かした特色ある教育活動を実施する。	4:平日及び土曜日の公開を5回以上実施した。 3:3~4回実施した。 2:1~2回実施した。 1:1回未満の実施であった。	4	2:60%以上	4	今年度は、「おおたサイエンススクール」10年目となり、「サイエンスコミュニケーション」の学習も8年目を迎える。昨年度にその研究成果を発表し、昨年度より第2ステージと位置づけ、昨年度は、これまでのまとめ、今年度からは、新單元の開発に取り組み始めた。今後も、子供たちの確かな学力を向上させる授業改善を日常的に続けていくだけでなく、それを保護者に理解いただけるよう、情報発信にも努めていく。	
		研究室訪問、国際理解のための交流等、東京工業大学・地域と連携した教育活動を実施する。	4:学期に2~3回(年間6回)以上行った。 3:学期に1回(年間3回)以上行った。 2:年度間に1回以上行った。 1:実施しなかった。	3	1:60%以下	4		

○「成果評価」は、各校が4段階で定めた成果指標によって行う。  
 ○記入にあたっては、各学校で取り組んでいる自己評価項目に照らし、該当する項目を取りまとめて行う。  
 ○学校関係者評価の「評価」は、A:自己評価は適切である B:自己評価はおおむね適切である C:自己評価は適切ではない D:評価は不可能である の4点について、評価した人数を記載す